

2024年2月10日(土) サレジオ会日本管区 サレジオ霊性セミナー講話 [15分]

## ■「夢」について——神のよびかけ・人間ののぞみ・共同体の目標

担当：阿部仲麻呂

### 1. 「夢」には多様な意味があります

みなさんは、「夢」ということばを耳にしたときに、いったい何をおもい浮かべるでしょうか。先月は御正月でしたから、「初夢」を連想した人もいるかもしれません。

さて、サレジオ家族全体の2024年度のストレンナ（おくりもの、年間目標）は「ドン・ボスコの夢、わたしたちの夢——9歳の夢から200年」です。この目標はサレジオ会総長のアンヘル・フェルナンデス・アルティメ枢機卿が私たちにプレゼントしてくれたものです。総長のよびかけは二つの解説にまとめられています。まず、①『2024年度のストレンナの前提』という準備文書は2023年7月25日に発表されています。そして、②『2024年度のストレンナ』という解説文書は2023年12月8日の聖母マリアの祭日に発表されています。これら二つの文書を読めば、総長の気持ちが私たちにもわかるようになります。

しかし、総長の二つの文書を読んでいると、私たちの頭のなかは、だんだん混乱してきているのではないのでしょうか。「夢」ということばのイメージがたくさん出てくるからです。「夢」には、ほんとうに多様な意味が重なり合っているのです。総長がどの意味で「夢」ということばを使っているのか、私たちにはわからなくなるのかもしれませんが、それゆえに、「夢」の意味を再確認することが必要になります。

### 2. 「夢」の意味——「神からのよびかけ」、「人間によるのぞみ」（個人の願望）、「共同体全体の目標」

少し整理します。サレジオ会のローマ本部に住んでいる総長が使っている「夢」ということばには、少なくとも三種類の意味があるのではないのでしょうか。まず、第一の意味としては「神からのよびかけ」です。次に、第二の意味としては「人間によるのぞみ」あるいは「個人の願望」です。さらに、第三の意味としては「共同体全体の目標」です。

こうして、「夢」には「よびかけ」・「のぞみ」・「目標」という多様な意味がふくまれていることがわかります。総長はヨーロッパの歴史的な文化の流れのなかで生まれて、その土地で生活するのに必要なことばを身につけてから、よりいっそう幅広く世界全体に向けて語っています。それゆえ私たちも総長の生活習慣の感覚を学びつつ理解する努力をします。

まず「よびかけ」について。これは「神からのよびかけ」を意味します。古代人たちは、「夢」をみると、「神からのお告げだ!」と感じたみたいです。人間が眠っているときに、神が「夢」をとおしてよびかけてくる、という発想をヨーロッパの古代人たちがいっていたのです。創世記に登場する宰相ヨセフ、マタイ福音書に登場するヨセフが代表例です。

次に、「のぞみ」について。これは、「人間ののぞみ」のことであり、あるいは「個人の願望」のこともあります。ヨーロッパの古代が終わり中世の時代に入ってから「夢」の意味を理解して解説する占いや夢判断の技術が発達しました。ところが迷信にふりまわ

されて、何が真実であるのかがわからなくなった中世の人びとのなかから冷静なまなざし  
で物事を見究める科学者たちが活躍するようになり、やがて人間だけの実力で世界を快適  
な居場所にすることを目指しました。そうすると、ヨーロッパ近世から近代にかけての人  
間の心の状況の研究も深まることになりました。このような心理学研究の流れをつくった  
専門家たちは「個人の願望が心の底にうずまいており、睡眠の際の無意識状態になると  
『夢』というイメージをとおして浮かびあがるのだ」と解釈するようになったのです。

さらに、「目標」について。これは「共同体全体の目標」を意味します。「神からのよび  
かけ」と「個人の願望」とが響き合って重なり合い、私たちの心の底に「召し出し」（召命、  
ヴォケーション）が芽生え、やがて「自分の使命」（果たすべき役割、ライフワーク）が明  
らかとなるのです。そのような個人的な使命感に共鳴する、まわりの仲間たちが目覚めて  
目標を共有するときにサレジオ修道会や扶助者聖母会、そして協力者会やアダマなどを始  
めとするさまざまな在俗会、日本ではイエスのカリタス修道会などの大きな運動が合流し  
てサレジオ家族が成立したわけです。

こうして『2024 年度のスorenナ』を理解する際に、「夢」の多様な理解の仕方を学ぶ  
必要が出てくるのです。「夢」を一つのイメージだけにとどめているかぎり、今回のスoren  
ナの幅広い視点が理解できないままとなるからです。ドン・ボスコは 9 歳のときの「夢」  
をとおして神ののぞみを学び、人生のなかで五回以上も解釈しなすことで自分や後継者た  
ちの共通の願望を調和させつつまとめあげ、サレジオ家族全体の目標を明らかにしました。

### 3. 「母親」（母）であり「先生」（師）であるマリア——サレジオ家族全体の模範

御父である神によってこの社会に遣わされた独り子イエス・キリストは御父の深いおも  
い（愛情深くあらゆる相手を活かすこと）を見事に実現しました。そのキリストが、夢を  
とおしてドン・ボスコに対して聖母マリアを「母親」として、しかも「教師」として示し  
ました。つまりマリアは「母」であるとともに「師」としてドン・ボスコの生き方の模範  
となりました。まさにドン・ボスコによる「9 歳の夢」は、私たちが聖母マリアの模範に  
よって支えられて、聖母マリアの模範を受け継いで生きるべきことを教えてくれるのです。  
この方向性はサレジオ家族全体の歩み方そのものです。私たちが若者たちと関わる際に、  
「母親」として「先生」として聖母マリアのようにおだやかにていねいにやさしく接する  
ことが目標となります。ローマを本部とするカトリック教会、特に聖パウロ 6 世教皇はマ  
リアを「教会の母」として尊敬して模範とすることを強く勧めています。それゆえドン・  
ボスコが聖母マリアを大切にすることは、まさに教会共同体の基本方針と重なります。

ここで『2024 年度のスorenナ』のなかから、ひとつの文章を引用しておきましょう。  
「私 [総長] はキリスト者の助けである聖母マリアが私たち家族全員にとってほんとうの  
母親であるとともに教師でありつづけてくださることを心から信じています。私 [総長]  
は、人生を決定づけた初夢としてドン・ボスコがみた情景のなかで主イエスが語られた預  
言的な言葉が真実であると確信しています。聖霊の賜ものとして、御父の望むカリスマが

存在するあらゆる場所で、マリアはいまでもそこにしっかりとたたずみつづけています。そして、私たちの努力をはるかに超えて、どの家庭でもマリアがともにいてくださるのだと私たちは信じてよいのだと実感しています」。

そして、「マリアの模範」に倣うことの意味を総長がていねいに述べていますので、引用しておきましょう。「母親であるとともに世話人でもあることで、マリアは輝いているのです。彼女自身が幼い頃に、天使からのよびかけの言葉を受け取ったときに、つまり重大発表の際に、彼女は必要以上の質問はさしはさみませんでした。神からのよびかけを伝えた天使の言葉を彼女が『はい』と受け容れたときに、彼女は次のように言いました。『御言葉どおりになりますように』と。彼女は、神の言葉を受け容れることにすべてを賭けたのです。彼女のいとこのエリサベトがマリアの手助けを必要としたとき、マリアはすぐに旅の計画を立てて、自分にとって必要なものは脇に置き、決してとどこおることなく、すみやかに出発しました。そして、息子のイエスの痛みが彼女にも影響を与えたときでさえ、彼女は強かったのです。マリアこそが彼 [イエス] を支え、最後まで付き添った女性だったのです。母親であり教師でもある彼女は、たとえ騒音や暗闇が色濃く支配する環境に身を置いていたとしても、そのまっただなかで彼女を求める若者たちをみつめるのです。彼女は痛みの激しさに支配される失神状態の沈黙のなかでこそ語りつづけ、希望の光を灯しつづけるのです。私はマリアに忠実に従うことを夢んでいます。ドン・ボスコがマリアという母親によって人生を大きく転換させたように、私たちサレジオ会員たちは、若い少年少女たちばかりではなく、さらにあらゆる若者たちをも、あの母親の愛情に負けず劣らず恋に陥れさせるのです。なぜならば、『聖母こそがドン・ボスコにとってすべてだったからです。そして、同じことを望むサレジオ会員たちが創始者の精神を身につけるには、この献身的な姿勢で創始者に倣わなければならない』からなのです」。

#### 4. 愛情のこもったまなざしで相手をながめて具体的に手を差し伸べること（アシステンツァ）——若者たちに対して、おだやかにていねいにやさしく接すること

総長の言葉を引用します。「神こそが私たちの生活に働きかけ、介入する道筋を、私たちの教育が実現しようとしているのです。『サレジオ会における愛情深さに満ちた親切を生きる父親』としてのドン・ボスコと同じ姿になりたいと切望するほどの情熱が、いまこそ必要となります。世界中の少年少女たちは訓練を受けた専門家と関わるだけでは救われるわけではなく、**愛情のまことの専門家**と出会うことが欠かせないのです。つまり教育者、兄弟姉妹、友人、父親、母親として親身になって若者たちと関わる私たちの活躍が必要です」。

総長が言うように、サレジオ家族の大人たちは「愛情のまことの専門家」となるように招かれているのです。私たちが愛情をきわめて数多くの若者たちと出会い、支え、はげますことが、いまこそ必要なのです。世間の大人たちが他人を利用して自分の利益だけを独り占めするような自己中心的で「どうもうなオオカミの心」で生きているのを見て、若者たちも悪影響を受けています。しかしマリアのようなおもいやりをいだいて誠実に生きて

いる大人たちもいます。みなさんが過去に若者だったときに、親切な大人と出会って大いに助かった思い出があるかもしれません。その思い出をノートに書いてふりかえりながら、今度は自分が若者たちと出会って支えあげます大人になれるように、毎日少しずつ努力を積み重ねることが欠かせません。その際に、私たちは若者たちに対して、おだやかにていねいにやさしく接することが目標となるのです。愛情のこもったまなざしで相手をながめて具体的に手を差し伸べること（アシステンツァ）が一番重要です。そのことをドン・ボスコは9歳の夢のなかでマリアから学んだのです！

#### 5. まとめ——夢をいだきましょう！

ここで、まとめます。総長の言葉を引用してしめくくります。「夢がなければ人生には意味がありません。人間にとって、つまり私たち全員にとって、夢をみることは、自分自身の理想や人生の価値を心のなかに映し出すことを意味しています。若者たちがかかえている最悪の貧困状態が彼らの成長を妨げています。若者たちは夢をみることによって、それまでは夢を奪われていたことに気づけるようになり、大人たちがでっち上げたむなしい夢を押し付けられることから解放されるようになります。私たち一人ひとりが神の夢そのものなのです。何が私のものなのか、神が私にどのような夢をいただいているのかを知ることが重要です。そればかりではなく、私たちは、自分自身および私たちの兄弟姉妹の幸福に関わる夢を発展させ、達成するよう努めなければなりません。[死去する前の年の] 1887年5月16日に、[72歳の] ドン・ボスコが感動のあまり、喜びながらもむせび泣いたことを私たちは思い出さざるを得ません。彼の人生が、彼の使命が、彼の使命を方向づけたあの夢が『実現したからです』。そして「それぞれの出来事において適切なタイミングでおたがいに支え合う人びとこそが、『謙遜で』あり、『強い』社会を築き上げることができるようになるのです。そして、『たくましさ』[あるいは『決してあきらめない忍耐強さ』]は宣教する際に非常に重要であり、経験を積み重ねるごとに、ますます成熟するものなのです」。

最後に、今回の『2024年のストレンナ』を別な表現で言い換えておきましょう。「あらゆる子どもたちひとりひとりの『9歳のかべ』（不安、怖れ、恐怖、劣等感、自信のなさ、コントロール不能な状況、どうもうなオオカミの心の状態）をいっしょに乗り越える旅に出ましょう！」

2024年1月20日（土）記

●2024年2月10日(木) サレジオ会日本管区 霊性セミナー講話 **補足資料** 担当；阿部仲麻呂

◀「ドン・ボスコの夢 わたしたちの夢——9歳の夢から200年」▶ (サレジオ会日本管区訳)

■2024年度のストレンナ(贈りもの、年間目標)の前提；阿部仲麻呂による個人的なコメント

★あらゆる子どもたちひとりひとりの「9歳のかべ」(不安、怖れ、恐怖、劣等感、自信のなさ、コントロール不能な状況)をいっしょに乗り越える旅に出よう！

\*ドン・ボスコが見た「9歳の夢」は「幼児期」から「青年期」へと成長してゆく境界の出来事である。

子どもの「幼児期」には母や周囲の人々が親切に保護してくれるが、「青年期」に向かうほど保護がなくなってゆく。

子どもが親から自立する努力を始めることで反抗期(獰猛なオオカミの心の状態)を過ごすことになるし、大人たちも反抗的でなまいきな子どもをぞんざいにあつかい始めるからである。

子どものがわの自立や反抗と大人たちの冷たさが同時に始まる危機的な時期を「9歳のかべ」と呼ぶ。

\*サレジオ家族の各関係者には、ドン・ボスコのように「9歳のかべ」を乗り越えて「9歳の夢」を掲げて成長してゆくとともに、9歳の子どもの尊い道行きをいっしょにたどるアシステンツァ(ともに歩むこと、いっしょに支えること)を深める役目がある。

**幼児期** [母子密着期/依存期]

⇒

**青年期** [親離れ/独立期/自立期/自我確立期]

### 幼児期と青年期との境界

0 ————— **9歳** ————— 18歳 —————→

子どもが母親に護られている時期

⇒ **子どもが自立して社会で生きてゆく時期**

つまれている

物事を**客観視**するようになり、他者との比較によって**劣等感**をいただく。

目に見える具体的なものや身近なことをありのままに学ぶ時期 → 9歳は学習内容の高度化や抽象化が始まる時期である。

・母と子が密着して生きている時期、子どもは母からの保護

→ ・子どもは物事を客観視できるようになり、母から自立して自力で生き始める。

のなかで生きている

・子どもは母からの保護を離れて、社会の荒波に独りで入ってゆく。

・好奇心旺盛な状況である

・学習内容の高度化や抽象化につまずく子どもは不安や恐怖を感じる(自分が経験していないことにおもいはせたり、将来のことを考えたりすることに不安や恐怖を感じる)。

・自分の現実の状況を客観視することで、他人との差に気づかされて劣等感をいだきはじめる→親には話せない、苦悩し反発する、自立しようとする、孤独になる→心の内面の成長に向かう。

解決策；①第三者とのかかわりを増やす。 ←イエス・キリスト、聖母マリア

②具体的なイメージを使って理解する努力をする。 →狼が羊に。

③具体的にほめる。 →暴力ではなく。

④子どもがつまづいていることをいっしょに乗り越えるように。

具体的に話し合い、いっしょに同じ作業をになう。⇒アシステンツァ

⑤子どもの話を先に聴いてから、大人がわの経験談や意見を語る。→ささやき

⑥別の経験をやる場に案内する（ふだんと異なる環境につれていったり、新しいことに取り組んだりしてリフレッシュさせる）。 →あそび、信心業など

※「9 歳」の時期をめぐる子どもの発達に関しては、酒井厚『対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ——重要な他者間での信頼すること・信頼されること』川島書店、2005 年、という研究書も参考にした。

## \* 「夢」の解釈

1. 「神」からのよびかけ——超越的な出来事：古代－中世

↓

2. 「人間」の心の内面の欲望が無意識のうちに表出してきたもの——無意識的な願望：近世－近代

↓

3. 「神」からのよびかけと「人間」の心の内面の動きとを統合する——バランスよく理解する：現代

古代の時期には、中近東などの地域では旧約聖書の創世記に登場するヨセフなどを始めとする「夢を解く人物」がエジプトのファラオなどの権力者から厚遇された。夢は神や超越的な世界からのよびかけとして理解されていたから、「特別な解釈者」が重用されたのである。人間の思考力や権力をはるかに超える次元で夢が理解されていたことがわかる。そして、マタイ福音書 1 章からもわかるように、イエス・キリストの養父ヨセフも夢のなかで天使のはたらきをとおして神のよびかけを受けている。

近世から近代にかけて、ヨーロッパでは、たびかさなる諸民族独立のあおりを受けてキリスト教の教会共同体内部においても民族ごとに独自の統治機構を設定して独立しようとするキリスト者同士の争いが生じた。その派閥抗争に巻き込まれないように、目に見える人間社会の枠組みだけで物事を運営しようとした知識人たちが自然科学の法則に沿った現世的な技術革新をもたらすと同時に一切の信仰の立場を排除した（キリスト教諸教派の組織抗争に巻き込まれないように）。その結果、夢の解釈の際も「神からのよびかけ」に注目する姿勢を一切排除し、人間の心の奥底の状態の分析に終始し、夢が人間の心の奥底に潜む願望（「欲望」[性悪説]あるいは「聖なる望み」[性善説]か）の浮かびあがりの事態として解釈されるようになった。特にフロイトなどの心理学者は夢を人間の下劣な欲望のあらわれとしてのみ解釈しようとして、夢の聖なる次元をつぶしてしまった（人間の心の内面の無意識下の欲望の動きとして夢を論じた）。

現代においては、夢は神聖な次元と人間的な次元の両面をあわせもつ複雑な事態として多角的に理解されつつ学際的な研究がつづいている。「古代の夢理解の背景」と「近世－近代の夢理解の背景」とを両方も考慮に入れた独自のバランス感覚が保たれて夢の研究が積み重ねられている。